

あいさつ100%の推進

平成20年

学校だより 2月 NO.13

http://www.funakoshi-e.educity.hiroshima.jp/ 広島市立船越小学校 平田健三

コミュニケーション、かわりあい を大切に

はてな？ なるほど でも・・・そうか！

「電卓に好きな3桁の数字を置いてみてください。さらに同じ3桁の数を入れてください。例えば、456 456といった数です。皆さん一人一人は当然違った6桁の数が電卓の画面上に出ていることになります。

次に、この数を7で割ってください。私の数であれば65208と割り切れます。皆さんの数も同じように割り切れます。続けて、今度は11で割ってください。皆さん、割り切れます。私の場合は、5928です。さらに、その数を13で割ってください。今度も割り切れます。よく見ると、今度は初めに入れた数に戻っています。そうですね。私のは、456です。

こうなると、誰でも「なぜだろう？」という疑問が頭にわき起こってきます。これが本当の問いです。」

このように語るのは、筑波大学附属小学校の副校長坪田耕三氏です。氏は続けて言います。

「こんな問いが発生すれば、もう子どもは自ら動き出します。何度も別の数でやってみますし、ノートに式を書いてその訳を探ろうとします。全部が解明できなくても、教室に同席する仲間と共に知恵を出し合ってなんとか理由を見いだすことができます。この一連の活動によって、本当の意味で算数の「問題」に出会うことになります。これを形式的にやってしまうと、子どもが夢中になって取り組む芽を摘むこととなります」(『教育研究』no.1270,2007.12p27 参照)

子どもの学習意欲は、切実なる問い「？」が鍵を握ります。そのようなことをより強く意識して授業に臨まなければならないと改めて感じさせられました。

「**四本足の動物**で、漢字一文字の動物を10個書いてください。30秒でお願いします。次に、漢字一文字の花を10個30秒でお願いします。なぜか動物の方が多く書いているはずですが、なぜ私たちは動物の方がたくさん書けるのでしょうか」。これは、千葉大学教授明石要一氏の講演会での言葉です。氏はその理由を三点挙げられました。二つ目の理由として述べられたのは次のとおりです。「子どもの認知の仕方が違うのです。簡単に言ったら、動くものは記憶に残りやすい。動かないものは残りにくい。動物はちょこまかちょこまか動くじ

やないですか、だから記憶に残りやすいのです。学習する場合は子どもに変化をつかってやると記憶に残りやすいのです。優秀な先生は良い発問をして動きをつかってあげますよね。子どもの認知の仕方が分かっているから。」とのこと。

他の二つの理由を皆さんは考えつきますか？ここでは省きますが、明石氏は、要は「体験量が子どもの学力を左右する」と主張されるのです。

「**中学・高校時代**を思い出してください。中間試験、期末試験の一週間、皆さんはどんな勉強方法でしたか。四つから選んでください。

一つ目 ノートを整理して単語帳を作り、年表を作り、マーカーを引いて、『ああ、ノートがきれいに出来たわ』と、自己満足型ね。いわゆるコツコツタイプです。

二番目は一夜漬けタイプ。『えっ、明日数学？ やばい！』半分徹夜でがんばる。

三番目が、『あの先生ならあそこが出る』とヤマをはる。過去の問題を調べたりしてヤマをはる。

四番目は勉強だけが人生じゃないといって勉強しなかった人。
千葉県の中学校二年生900名に聞きました。どの勉強タイプが一番多かったと思いますか。」

皆さんの予想はどうでしょうか。四番目が約37%で一番多く、次がコツコツ型で約35%。二番目の一夜漬けは25%ぐらい。三番目のヤマをはるが、15~18%ぐらいだそうです。

このデータを示して、明石氏がいちばん言いたかったことは何だと思いますか。明石氏の言葉をそのまま借りると次のようになります。

「今日いちばん言いたいのは、三番目にいってほしいということです。小学校6年間は、コツコツでやってほしいの。そして学習技能を身につけたら、中学・高校からは、なんとかヤマをはる練習にいて欲しいのです。ヤマをはることに転換するとなぜいいかと申しますと・・・」(紙幅に限りがあるので略します)

紹介した明石要一氏の言葉は、講演会記録から引用等させていただきました。

『広島県教育会・日本教育会広島県支部 機関誌第71号より』

日本製鋼所・広島製作所より図書への寄贈

日本製鋼所は創立百周年になるそうです。それを祝し、地域への還元の一環として本校にも30万円分の図書を寄贈していただきました。早速活用させていただいてます。お礼申し上げます。

